



社会福祉法人 済生会支部

大分県 済生会 日田病院 広報誌なでしこ号外版

能登半島地震に伴う DMAT活動報告

隊長 整形外科部長 森 啓介
隊員 看護部主任看護師 鞭馬 淳子
隊員 看護部主任看護師 生野 広樹
業務調整員 医事課係長 末竹 清治

医療の力で被災者を救う
DMAT災害派遣医療チーム



能登半島地震派遣DMATの活動

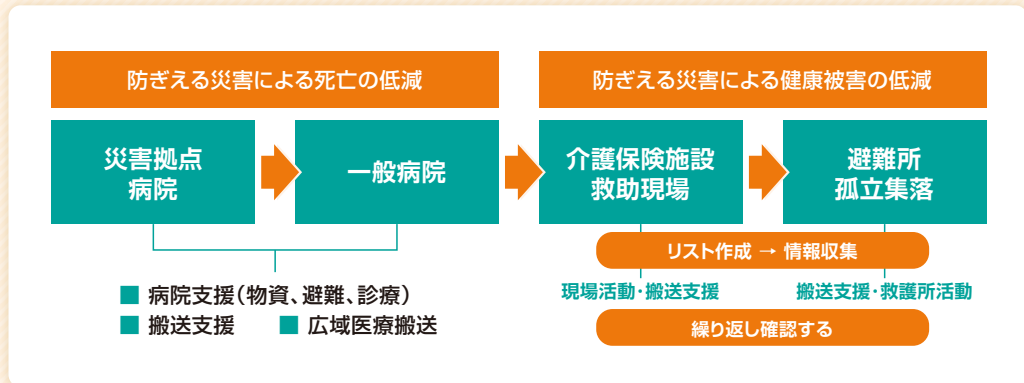
2024年1月

25日

- 能登半島地震派遣DMAT 出発
- 能登半島までの進入経路確認
さんふらわにて別府から大阪まで船で移動
大阪より陸路で石川県穴水町へ移動
- 公立穴水総合病院 到着
- 現地状況の確認
- DMAT活動の優先順位



26日



- 避難所スクーリング
諸橋公民館避難所、旧兜小学校避難所、曾良集会所避難所
避難者の問診や臥床医療搬送を調整などを行った。
- 傷病者情報確認・対応
- 避難所より救急搬送
15:30 曾良集会所
17:12 金沢医科大学



27日

- 搬送ミッションのため待機
- 穴水総合病院の被災状況確認

28日

- 資材調達にて珠洲へ移動
調整本部へ報告を行い、被災地域に移動。
震源地に近づくにつれて建物現状がひどくなる状態であった。
- 資材調達にて輪島へ
- 後続隊大分大学病院DMATへ申し送り
交代日となり、施設の清掃及び、忘れ物チェック、後続隊任務の
対策本部長をお伝えして、引継ぎとなる。



29日

- 福井県の宿泊施設に向けて撤収





避難所スクリーニング

避難所より救急搬送

対策本部

安否情報等の確認

自衛隊の船

スタッフによる活動報告

能登半島地震を振り返って

隊長 整形外科 部長 森 啓介

令和6年1月1日午後4時10分、石川県能登地方にM7.6の地震が発生した。輪島市では震度7を観測。スマホに地震発生の通知が届いて、大地震が起こったことを知った。午後4時22分、大津波警報も発令。東日本大震災の記憶が頭をよぎる。北陸地方の災害ではあるが、九州もDMATの要請がかかるかもしれない。日々刻々と流れてくる、被災地の情報。EMIS（広域災害救急医療情報システム）上での医療機関の応援要請。1月10日、九州を除く全地域に、DMATが参集要請された。1月14日、第6次隊として九州も出動要請がかかった。DMATは超急性期から活動を想定している災害派遣医療チームであるが、要請時は急性期から亜急性期に移行し、徐々に慢性期に移行するフェーズであった。当院もその役目を果たすべく、派遣参加の名乗りを上げた。九州のDMAT隊に出された使命は、公立穴水総合病院および穴水町内の医療ニーズに対して、約3週間の活動であった。大分県は、県内の6医療機関で対応することとなり、通常派遣より数日長い活動を指示された。当院は、1月26～29日での現地活動となるため、移動時間を考慮すると、1月25～31日が派遣期間となった。当院の救急車を使い、陸路で能登地方を目指して移動。能登半島に近づくにつれ、道路は段差があり、うねりもでてきた。さらに近づく、道路が崩壊し、今まであった道がない。全壊している家も出てきた。ニュースでは見ていたが、これほどまではと、改めて地震の恐ろしさを肌で感じた。公立穴水総合病院に到着したが、この病院も被災していた。液状化の影響か、建物は15cm程持ち上がり、建物間の連絡通路は破損していた。発災から約1か月が経とうとしていたが、いまだに通常の医療は再開できてなかった。それもそのはず、スタッフも被災者であり、家を失った人もいるからである。避難所から通っているスタッフもいた。電気は復旧していたが、上下水道はまだ使えない。トイレに行っても水は流せないため、小は外の雪を溶かして使い、大はビニール袋に入れてゴミ箱へ。手を洗うには水循環型スタンドを用いて、処理水を使用した。DMAT派遣に関しては、自給自足が大原則である。食事や宿泊も自分で探さないといけない。食料や飲料水は、すべて日田から持参した。ゴミも持って帰るので、できるだけかさばらないことを意識して用意した。宿泊は、病院の床に寝袋を使用して利用。一日で足腰が痛くなった。もちろん、お風呂もない。日に日に隊員の顔も疲労感が隠せなくなった。避難所生活を余儀なくされている人たちは、こんな思いをあの日からずっとしているのかと思うと凄絶を絶した。1月29日夕方、任務を終えた。日田への帰路の中、虚無感に襲われた。災害なんて、一生起こらなければいいのに…。

今回の能登半島地震での派遣にて感じたこと。それは、「当たり前なことが何一つない」ということ。蛇口をひねれば水が出る。たったそれだけのこともできませんでした。日々の生活を当たり前で過ごす、大切なことに気が付かなくなります。本当はそう思いたくないですが、災害が起きて初めて日常のありがたさを感じるのではないのでしょうか。自分が当たり前に行っていることに、幸せを感じ、感謝することを忘れないでください。

スタッフによる活動報告

R6年能登半島地震DMAT活動報告

隊員 看護部主任看護師 鞭馬 淳子 / 隊員 看護部主任看護師 生野 広樹 / 業務調整員 医事課係長 末竹 清治

活動のため、フェリーとDMAT車で被災地まで移動。被災地が近づくにつれて徐々に地震の規模や地震による被災の現状に衝撃を受けた。被災された方々に少しでも何かできることがあれば…という思いで気持ちを高ぶらせていた。当院のDMAT隊が活動した時期は急性期から慢性期に移行してきている時期であった。各地区に開設された避難所のスクリーニングや避難所で医療を必要とする被災者の医療ニーズのトライアージや搬送を行なった。現地の状況として電気は使用でき、断水は続いていた。各避難所の生活環境は決してよいものではなかった。被災者の中には、「かき乱しているだけではないか」「何回も何をしにきているのか」「ここでの情報（ニーズ等）をきちんと伝えているのか」等も聞かれ、短期間での活動の中での関わり方、接し方を十分気をつけなければいけないと感じた。また、被災地や避難所生活の被災者の方々の対応をしている中で、普通に生活できていることに感謝しなければならぬと改めて気づかされた。

年々、地震などの自然災害が多くなっている。日頃から災害に備えて、訓練の重要性や備品の確認等適宜行なっていくことが重要であると再認識した。今回の貴重な経験を活かし、今後の活動につなげていきたい。

お忙しい中、災害派遣に対し、快く送り出していただいた院長をはじめ、看護部長、師長をはじめ、スタッフのみなさん、そして、家族にも感謝致します。ありがとうございました。

最後に

災害はいつ起こるかわかりません。しかし、準備はできます。特に当院は災害拠点病院ですので、災害訓練を継続し備えておく必要があります。皆さんも、もし災害が起きたら？を考えて、今できる準備をしておくことが大切だと思います。

DMATとは？

院長 林田 良三



本年1月1日に発生した令和6年能登半島地震の被災地に当院DMATを派遣しましたので報告させていただきます。DMATについてはご存じない方も多いかと思いますが、私のほうから改めてDMATについて話をさせていただきます。

DMATはDisaster Medical Assistance Teamの頭文字をとった略語です。日本語では災害派遣医療チームと言います。災害時にその発生から48時間以内に災害現場において医療支援活動等を行えるよう特別な訓練を受けた医療チームのことをいいます。(現在では急性期後の様々な医療ニーズにも応えられるよう活動範囲が広がっています。)

DMATが発足するきっかけは1995年1月に発生した阪神淡路大震災でした。この地震では6,000人を越える尊い命が失われました。当時は被災者に迅速に医療を届ける体制や組織はありませんでした。後の調べで、もし初期医療を現場で適切に提供できていれば、このうち500人以上の命を救えた可能性があることがわかりました。この経験を教訓に2004年に東京都が「東京DMAT」を立ち上げ、一年遅れて2005年に厚生労働省が「日本DMAT」を発足させました。DMATには日本DMATと都道府県DMATの二つがあります。日本DMATは広域災害時に国の要請を受け、被災地に全国から派遣されるDMATです。一方、都道府県DMATは都道府県域内で発生した災害や重大事故発生時に都道府県の要請を受けて出動します。東京都に続き全国で都道府県DMATが次々に発足しています。ちなみに「大分県DMAT」は2008年2月に発足しました。今回のDMAT派遣は日本DMATとしての派遣でした。

災害拠点病院である当院にはDMATの派遣ができることや災害時に医療を提供する拠点になることが求められています。2007年に当院最初の日本DMAT(医師2名、看護師2名、事務員1名)を養成して以来、継続してDMAT隊員の養成を続けてきました。現在、18名のDMAT隊員(日本DMATと大分DMATを兼任する11名、大分DMAT 7名)を擁しています。また、2016年の熊本大分地震時にDMATを派遣した経験から、DMATカーの購入などさらなる装備の充実を図り、日本中で激甚化する自然災害、域内の重大事故に備えています。DMAT出動の実績も毎年、増えており2023年度は3月11日現在で14回のDMAT出動を行っています。

大分県には現在、日本、大分DMAT指定医療機関22病院と大分DMAT指定医療機関3病院があります。私達が属する大分県西部医療圏(日田市、玖珠郡)では当院が唯一のDMAT指定医療機関です。

今回、能登半島被災地に派遣した4名のDMAT隊員は多くの困難が伴うなか身を挺してその任務を遂行しました。そしてそれは貴重な災害時医療の経験になったと思います。この経験を職員みんなで共有し、地域唯一の災害拠点病院、DMAT指定医療機関として重責を果たすための糧にしたいと思います。